

# G

グランシップマガジン

[ジー] vol.31

GRANSHIP magazine  
SUMMER 2006

SPECIAL-1

## 詩人の眼

—大岡 信 コレクション展—

次代を創る顔

エッセイスト 甲斐 みのり

しずおかアーティスト・リレー

美術作家 横井山 泰

SERIES わが羅針 第31回

## 山下 洋輔

SPECIAL-2

LET'S GROOOOOVE!

おとみち 夏、踊る。  
2006

村松友視の文化漫遊⑱

グランシップ ベンクラブ

平野 雅彦 (情報プランナー)

詩

大岡信コレクション展

人

の

眼



Collection  
Makoto Ooka and his Collection

過去は相田のヤウに校正相のて

「いつの間にか集まってきた  
な」とは言ふまい。

すずくは 当時その場で  
自分で決めた 自分で買った  
作者から 歡喜をすてて受けとり  
抱きしめたものばかり。

一冊手にとり マージをめぐれば  
北歐の海の細長、薄茶の砂浜が  
ゆるやかに立ちあがる。  
冷のページとつとつと しかに開けば  
自叙した 親しい友と おもむき歩いた  
日本橋の雑踏が ぼっと広がる。

過ぎ去った時間は  
相田のじうにむすねて  
一枚一枚 現在のほくを折り畳み、  
さてそとに一枚一枚  
明日のぼくをくりぬける  
ことに熱中してゐる。

大岡信コレクション  
大岡信詩集



The Poet's Eyes : Makoto Ooka and his

The Poet's Eyes :

おおおか まこと ■東京大学文学部国文学科卒業。学生時代に日野啓三、丸山一郎(佐野洋)、稲葉三千男らと雑誌『現代文学』創刊。1956年第一詩集『記憶と現在』で注目され、59年には、吉岡実、清岡卓行らと『鰐』を結成、詩作に加え、外国語でも連詩を試みるほか、1950年代後半からは美術評論家としても活動。71年『紀貫之』で読売文学賞、80年『折々のうた』で菊池寛賞、90年には『詩人・菅原道真』で芸術選奨文部大臣賞を受賞。ほかに87年フランス芸術文化勲章シュヴァリエ、93年仏芸術文化勲章オフィシエを受賞し、97年には文化功労者顕彰、2003年文化勲章、04年フランス政府よりレジオン・ドヌール勲章オフィシエ受賞。詩集に『春少女に』『捧げるうた50篇』『旅みやげにしひがし』をはじめ、著作『折々のうた』(通巻17冊)『連詩の愉しみ』『ヨーロッパで連詩を巻く』『うたげと孤心』『日本語の豊かな使い手になるために』など。明治大学教授・東京芸術大学教授・日本ペンクラブ会長などを歴任。31年静岡県三島市生まれ。



深大寺の自宅にて、  
駒井哲朗の版画と《アララトの船あるいは空の蜜》が見える。1983年

戦後の日本を代表する詩人、大岡信が、創作に魂を注ぐ一方で深い関心を寄せてきたもの、それが美術だった。NHKの「日曜美術館」などにおけるわかりやすく魅力ある解説に、作品理解への視界が拓かれたという人も多いはずだ。単なる詩人の興味ではなく、制作の現場に立ち会い、作家の創作を刺激する。そうした交流の中で培われた「鑑賞眼」。文学者ならではの言葉の選択と、鑑賞の達人ならではのとらえ方、そして、作家との結びつきから醸成されるものがそこにはある。そこで今夏、グランシップで開催される「詩人の眼 大岡信コレクション展」において紹介予定の作品とともに、ここに氏と美術との関わりをひもといいてみたいと思う。

# 詩人の眼

本コレクションのタイトル「詩人の眼」について尋ねると、氏は「果して自分が詩人の眼で美術をとらえてきたのかどうか。そんなことは考えてみたことではない」という。

遠くから。そして、ある一点へ。

それは日本画商の信用のものさしでもあったという。

大岡氏が南画廊の志水と出会ったのは、フォトリエ展がきっかけだった。以来、氏は、南画廊が働きかける世界の現代美術の紹介と、日本における新人作家の発掘に立ち会いながら、多くの美術家たちと交友関係を結んでいく。

東京画廊と並び、戦後前衛美術界の礎を築いた双壁といわれたが、七十九年の志水の逝去により画廊は閉鎖。葬儀委員長を務めたのは大岡氏だったが、それは画廊の第一世代の終焉とさえいわれている。

ある谷川俊太郎は、詩の創作において、自分が聴覚に触発されるのだとしたら、大岡信という詩人は視覚、いわゆるイメージに寄り添って書くタイプなのではないかと語っている。遠くから眺め、やがて細部にズームアップしていく。それは詩作においても、美術評論においても同様であり、これについては、本人も「そうかもしれない」と認めた。

# 南画廊

## と志水楠男

### 日本の前衛美術界、伝説の画廊。

東京の日本橋にあった「南画廊」は、今や伝説の画廊だ。今からちょうど半世紀前の一九五六年。南画廊は、画廊主の志水楠男のもと、「駒井哲郎個展」で幕を開ける。

その後、今井敏満やサム・フランシスらのアンフォルメル(＝第二次大戦後に興った抽象画の運動。定形を否定し、色彩を重んじた激しい表現)の運動に協力。また、五十九年には戦後初の現代美術の個展「フォトリエ展」を成功させ、美術界に旋風を巻き起こすなど、あつという間に南画廊は、当時の現代作家にとって垂涎の画廊となった。

画廊主の間でも、南画廊と志水の名は特別だった。当時、画廊主たちがアメリカやヨーロッパの先々で「ミスター・シミズを知っているか」と問われたというのは、有名な話だ。ノーと答えようものなら、相手にされない。



南画廊での「加納光於展」で。左から加納光於、大岡信、瀧口修造(1973年10月)



東野 芳明 《シャドー》制作年不詳  
東大文学部の国文科の大岡と美術史科の東野は、卒業後、飯島耕一とともに「シュルレアリスム研究会」の前身をつくる。南画廊の「フォトリエ展」を仕切っていたのが東野で、彼を通じて、画廊主の志水楠男からジャン・ポーランのフォトリエ論の翻訳を頼まれたのが、大岡の南画廊を中心とする交友関係の発端といえる。



### 宇佐美 圭司

《オールド・ファッション・アーケード》1965年  
大岡によると、「言葉を馬鹿にする芸術家が多い中で、宇佐美はかなりの理論家」だったという。当時22歳だった宇佐美が、東野芳明に芸術論議を挑む姿に興味をそそられ、彼のアトリエに向かう。そして、翌年、名もなき作家があつた南画廊で最初の個展を開くというので、美術界は騒然となった。大岡は述懐する。「彼のデビューが成功しなかったら、南画廊の名は地に墮ち、僕も消えていたことでしょう」

言葉にならないものへの「理解」。

本展の図録中、欧米でも高く評価される画廊主で、六十年代から七十年代にかけては氏の実業書で学んだという佐谷和彦も、その卓抜した理解力、判断力について触れている。「何よりむつかしい言葉がなく、普通の言葉で表現されるのは、初心者にとってありがたい」と述べ、同じく詩人であり、すぐれた評論家であった瀧口修造も、詩は別として「評論は普通の言葉で表現された。それは二人ともすぐれた人物であることを示している」と記している。

# 美術評論

大岡氏には、若い頃、その鋭い感性と分析力から「理解魔」というあだ名がついていた。氏によると、それはすぐれた美術作品を持つ「理解できないもの」「言葉にならないもの」に強く惹かれ、それらを「わかるようにしよう」「なんとか言葉にしよう」という思いが、そうした呼称につながったのだらうという。



瀧口 修造  
『リパティ・バスポート 詩人旅行必携 大岡信のために』1963年  
実験的な詩作を試みる一方、シュルレアリスム運動を推しすすめた一人。戦後は、多くの前衛作品についての批評活動を展開。大岡曰く、「美術評論家としてよりも、詩人として大切な人」。本作は、10年勤めた読売新聞の記者を辞めてフランスに行く際に贈られたもの。

## 大岡作品を飾った作品たち。

# 表紙 原画

数年前に刊行された『大岡信全詩集』は、延べ約七五〇ページにも上るほど、世に出た大岡作品は膨大だ。しかも評論や歌集などもある。つまり、それらの表紙を飾った作品も膨大だが、今回のコレクションでは、こうした作品の原画を幾つか観ることができる。



②



①

① サム・フランシス 《大岡の月》1964年  
『詩人の眼 大岡信コレクション』図録  
本展図録に使用された作品。大岡の長男、大岡玲によると、大岡は言葉のめまいに巻き込まれながら詩を書き、サムも絵の中に身を投げ込むように描く。二人は創造の体質が似ているという。

② 安野 光雅 大岡信・谷川俊太郎編集『現代の詩人11 大岡信』1983年刊  
安野とは「権」のメンバーの谷川俊太郎、岸田祐子らを通じて知り合った。左側の文字が「大岡」に見える古めかしくて面白いものを見つけたから、と使われたもの。

③ 大岡 信 《まぶたの裏で見た風の夢》1975年  
大岡信『年魚集』 1976年刊  
自著の装丁は、10冊ほどあり、そのうちの一つである。本シリーズでは『彩耳記』『狩月記』『星客集』の表紙も手がけている。版画の手ほどきは、加納光於から受けたという。

④ 加納 光於 《M.O(ポートレート)》1977年  
大岡信詩集『優劣の寝返りの下で』新版 1977年刊  
20代のとき、瀧口修造が大岡と加納をひきあわせる。大岡が初めてコレクションしたのは、加納の《波》という作品で60年当時5千円。これが縁で加納に版画を教えてもらうようになる。

⑤ 中西 夏之 《春 少女に》1978/2005年  
大岡信詩集『春 少女に』 1978年刊  
銀座のバーで会ったとき、大岡は「君の作品は偶然が作っている」といい、中西は「仕組まれた偶然じゃないでしょうね」と問う。この大岡が言った「偶然」という言葉を中西は、今なお制作の深いところで反響されているという。



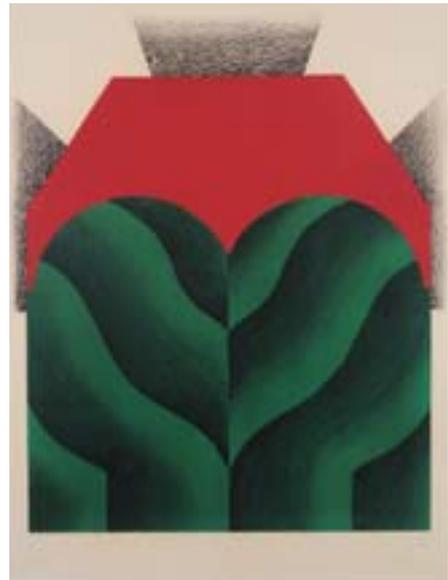
⑤



③



④



菅井 汲 《FORET AU SOLEIL》1967年  
大岡信評論集『現代美術に生きる伝統』 1972年刊  
大岡曰く「もっとも画風がスカッとしていた時期」の作品。知り合ったのは、1963年のパリの青年ビエンナーレ。抽象絵画風のものにデザイナー的な要素をつけ加えた作品が増えてきた頃だったという。

# 自作

銅版画の手ほどきは、加納光於のアトリエに通って受けたという。これまでにデカルコマニーなど、さまざま手法を試みており、自著の装幀も自ら一〇冊ほど手がけている。

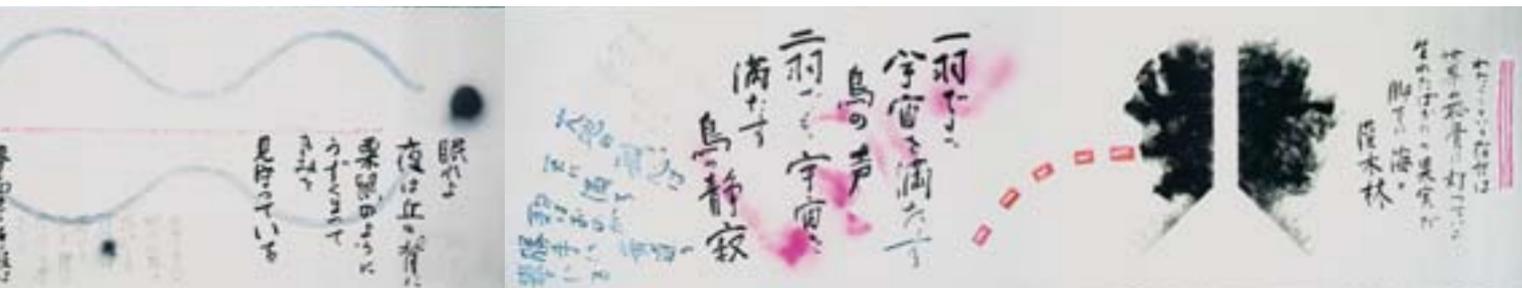
ときとして現る、詩人の「手」。



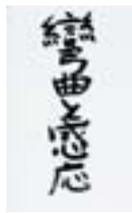
大岡信 《箱舟》1975年 \*発表当時のインスタレーション  
南画廊の志水の依頼で参加した試み。箱状のものに何かを詰めるという主題のもと、谷川俊太郎をはじめ、何人かが参加した。



大岡信 《山肌の裏側》1970年  
反転したものと反転しないものを組み合わせた本作は、版画の大家、加納光於が直接指導したという。ちなみに加納は、他人をアトリエに入れることはなく、大岡は特別だったのだ。



人と静物



時間



星ものがたり



「コラボレーションと一口で言っても、そのスタイル、手法はさまざま。それも氏の関わり方が毎回異なるのが面白い。詩と絵が静かに対座した駒井とのコラボ。また、嶋田&ノエルの三人コラボは、自由でのびやかな印象。また、加納とは立体と平面、絵と言葉が交錯し、菅井との即興制作は、まさにぶつかり合いといった感がある。宇佐美圭司は、氏について「楽しむ感覚にすぐれているから、相手の選び方に無意識の広がりがある。識性の代表のような人が、識性の一番遠いところで楽しんでいる」と語っている。

# 共同制作

それは楽しむ心。自在な呼应。

嶋田 しづ／大岡 信／ベルナール・ノエル  
《彎曲と感応》2004年  
日仏の詩人と画家による連作の中の一つ。大岡が原詩を書き、ノエルがフランス語に翻訳し、嶋田が絵を添えた。近作だが、嶋田とは40余年の仲。ノエルとは「まだ会ったことがない」そうである。

作品と、捧げた言葉と、エピソードが映す、日本の芸術界の一時代。

大岡氏が芸術家同士の交流を通じて、あるときは作家本人から贈られ、あるときは自ら求めた作品が四〇〇点にも上るといふ。すると氏は、「四〇〇点というけれど、それをあなたは多いと思いますか」と訊く。そう思う、と答えると、「全然多くなんかありません。集めようと思ったら、すぐですよ」と氏。友人の谷川俊太郎氏も、「彼が収集家だと思ったことはない」と語った。「彼には磁力のようなものがあって、それが人を、そして物をさらには言葉をも惹きつける、そう考える方が自然だ」と。

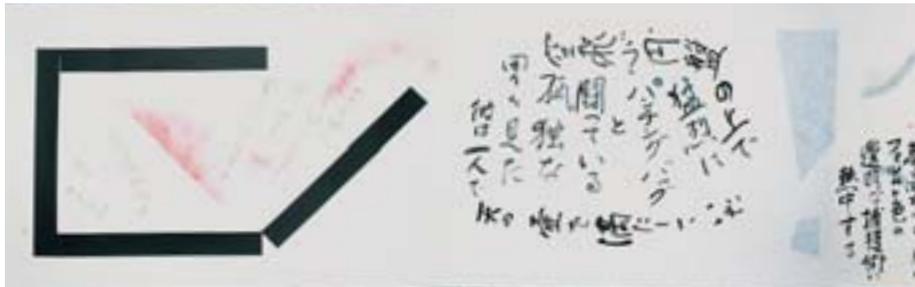
さて、今回、グランシップで公開される作品は、国内外の現代芸術家の作品や共同制作の作品など一五〇点、一点ごとの魅力もさることながら、作品や作家に捧げた言葉、作家とのエピソードがとて興味深い。美術と、音楽と、文学の枠を超えて交流し、刺激しあった日本芸術界の一時期がいきいきと映し出される展覧会だ。



《一時間半の遭遇》制作風景  
撮影：松本徳彦

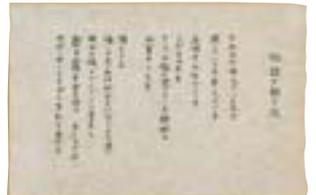
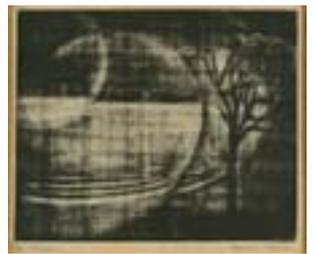
菅井 汲 / 大岡 信

《1時間半の遭遇》1983年  
63年のバリのビエンナーレでは、大岡の詩の朗読に、壇上の長い紙に描くインスタレーションは話題となり、その後、日本でも試みたのが本作。1時間半という限られた時間の中で、長さが10メートルもある紙に詩と絵を同時に即興で書きつけていった。



駒井 哲郎 / 大岡 信

《物語の朝と夜》1958年  
ユリイカ創立10周年を記念する「ユリイカ詩画展」でのカプリング。このとき、駒井は大岡に会うことなく、彼の詩集を読み、その中から「記憶と現在」の2編を選んで、まず銅版画を作ってしまった。これについては大岡は今でも「残念だった」と語っている。



加納 光於 / 大岡 信

《アララットの船あるいは空の蜜》1971-72年  
本作は、1年4か月をかけて制作された35点限定のうちの一つ。30代で創作に行き詰まりを感じていたとき、毎日のように詩を書き付けた葉書が大岡から届いた。それらがこのオブジェの奥には封印されている。アララットとは、ノアの箱舟が漂着した場所で、「言葉によって新しいものを存在させるべく」大岡が名付けた想像上の産物。



詩人の眼



大岡 信コレクション展

チケット発売中

'06年8月3日(木)~26日(土)  
10:00~17:00 (入場は16:30まで)  
グランシップ6階  
展示ギャラリー  
700円(当日800円)

記念トークショー

大岡信×大岡玲

参加無料

■8月19日(土) 13:30~開演  
■6階 交流ホール ■要電話予約  
(財)静岡県文化財団企画制作課  
TEL 054-203-5714

※開催日の前日までに、お電話でお申込ください。  
(定員になり次第締切)

- 【出品作家】  
相沢常樹 ハンス・アルトリング 安野光雅 井田照一 柳慧 今井俊満 宇佐美圭司 宇佐美爽子 榎本和子 大塚勇吏仁 岡田輝 クレス・オルデンバーグ 加藤敏郎 金子國義 加納光於 アレクサンダー・カルダー 清水九兵衛  
クリスト 黒田征太郎 駒井哲郎 嶋田しづ ジャスパール・ジョーンズ 菅井汲 曾宮一 念 高橋秀 瀧口修造 多田美波 谷川晃一 丹阿弥波子 ジャン・ティンゲリー 東野芳明 利根山光人 中西夏之 野崎一良 萩原朝太郎  
マリエル・バンクー パプロビカソ ジャン・フオートリエ 福島秀子 藤松博 藤原雄 松木研兒 サム・フランシス ベルナルノ・エル 前田常作 三好達治 ジョアン・ミロ 本宮健史 安田侃 オティロ・ルドン 柿沼和夫

GRAND

## 夏、踊る。

馬の蹄の音から  
カントリーが生まれたように、  
街の騒音から  
ロックが生まれたように、  
それはいつも日常の音とリズムから  
産声をあげてきた。  
そして、時代や肉体のその体温とともに  
それらは絶えず変わっていくから。  
ただ、ひたすら楽しもう、この夏のリズムを、  
新しい何かの、  
その誕生に立ちあえるかもしれないから。

# LET'S

## リズムを感じれば、自然にカラダは動く。 それがダンス、ただ一つの真理。



ダンスというのは、もっともらしい言葉でいえば、一定の時間と空間内に展開されるリズムカルな身体動作、ということになる。しかし、その発生については詳しくはわかっていない。ただ、世界中に現存するダンスそのものをはじめ、古代遺跡やその遺物から、おそらく「本能的」なカラダの動き、「求愛」のカタチ、「呪術的」なものあたりではないか、と推測されているのだが、そんな後付けの解説はどうでもいい。リズムを感じたらカラダを動かす。それがダンスにおけるたった一つの真理なのだ。

日本は、HIPHOP系やラテン系アーティストの流行によって、また、映画やテレビ番組のヒットも手伝って、空前のダンスブームだ。クラシック・バレエ、社交ダンス、日本舞踊、フラメンコ、サルサ、フラ、ストリートダンスと、どのダンススクールも大人気。しかも全世代にダンサーが急増しているというから、ブームの一語では片づけられない部分もある。

実際、グランシップが自主事業の中で一昨年から展開しているダンスイベント「おとみち」の過去の実績を見ても、来場者はもちろん、参加者がグンと伸びていることから、ダンスを「踊れる」「踊りたい」人口が増えていることがよくわかる。

**単なるブームに終わらない。  
本気のダンス・ウェイヴに乗り遅れるな!**



## あの「おとみち」がパワーアップして、 この夏もグランシップに上陸だ!

満ちる、そんなグランシップ恒例(になりつつある)夏のダンスイベントだ。

本番に向けてのオーディション(6月末応募締切)には、今年も多数が参加。8月のステージ「ダンスショーケース」にどんなグループが選出されるのか、まず、そこから気になるゾ!という人は、「おとみちダンスオーディション」でチェック。また、コレを機会にストリートダンスのダンスをマスター!そして首尾よくステージ体験も!という人は、初心者対象の「ストリートダンス ワークショップ」がおすすめだ。

パフォーマーとして、審査員として、講師として登場するゲストは、いずれも日本のトップクラス。ダンスビギナーも、ダンスホリックも、この夏はグランシップで DANCE ON THE GROOVE!



# Dance Show Case

観覧  
無料

おとみちダンスショーケースオーディション

参加応募受付中!

グランシップ 中ホール・大地

来る「おとみち2006」を盛りあげるべくダンスチームが集結。  
オーディションを見事突破したチーム(10チーム程度を予定)は、  
8/19の本番「ダンスショーケース」の出演が決定。  
ダンステクニックだけでなく、ダンスへの情熱、パフォーマンスの楽しさに注目!  
■審査員/TSUYOSHI (Spartanic Rockers)・おさみさお(おとみちMC)ほか



7/15 Sat キッズ部門 ★ 16 Sun アダルト部門

Hot Voice

世界で活躍する藤枝市在住のプロダンサーで、昨年からダンスショーケースの審査員を務めるTSUYOSHI氏にインタビュー!

TSUYOSHI

98年日本のブレイクダンスシーンの草分けである「Spartanic Rockers」結成に参加。同年英国での「UK BREAKDANCE CHAMPIONSHIP」チーム優勝。個人でも世界4位に輝く。05年ブレイクダンスの世界大会「レッド・ブル・ビート・バトル」に「Spartanic〜」は日本代表として挑むも惜しくも準優勝。



- Q** 第一回目から参加のTSUYOSHIさんは、引き続き「ダンスショーケース」の審査員もされるとのこと。どんなチームの出場を期待されますか?
- A** 最近のショーケースには、「コンテンポラリー」の要素が少しずつ含まれていて、どんなアイデアが出てくるのが楽しみ。スタンダードもカッコいい。とにかく本気なチームに出てほしいです。
- Q** 審査の基準で審査は?
- A** まず技術、ショーの獨創性。存在感のある人がいるか、流行をいかにうまく使うか。そして、どれだけ感情移入できているか。ちなみに自分の場合は、喜怒哀楽の「怒」のあたりです。
- Q** おとみちについて一言。
- A** どんどん大きくなっていくのがすごく楽しみです。同時に自分の練習量も自然に増えています。
- Q** 今回はスパルタニック・ロックースウィッチパニクルでご出演ですが、今年のみどころは?
- A** 去年イギリスの世界大会で二位だった作品をそのまま、一位を取りに行く気持ちでやります。パニクルからは植木豪、佐々木洋平がきます。今年もよろしくおねがいします。

今年も待望の開催決定! 初心者歓迎!

# Street Dance Workshop

ストリートダンス ワークショップ

7/23 Sun START!



ストリートダンスの基本をマスター。

本番は8月19日。グランシップ大ホール「おとみち」のステージで輝こう!

- 練習/計11回 各日19:00~21:00(予定) グランシップ地下1階リハーサル室ほか  
7/23(日)・25(火)・27(木)・30(日)・8/1(火)・3(木)・8(火)・10(木)・13(日)・15(火)・18(金)
- 本番/8/19(土) 17:10~17:30(予定) 大ホール・海
- 講師/永田 榮一(ギャングスター主宰)
- 参加費/2,000円(練習代・保険料・本番入場料含む)
- 対象/小学生高学年以上の個人(20名限定)先着順  
※未成年の場合は、保護者の同意が必要
- 申込み/電話で直接申込みを。054-203-5714(静岡県文化財団 企画制作課)
- 締切/7/15(土)定員になり次第募集終了
- 持ち物/飲料水、練習用の服装とシューズ、タオル  
※本番舞台用に上着とパンツ、ソックス、シューズをすべて白で各自用意のこと

Hot Voice

前回に引き続き、ワークショップを指導する永田氏にインタビュー!

永田 榮一

ギャングスター・ダンスチーム主宰。メジャーアーティストのバックダンサー・ツアースタッフとして活躍。静岡に戻った後は、後進教育のためギャングスター・ダンスチームを立ち上げる。キッズをはじめとするメンバーは、各地のダンスコンテストで優勝。また、OB5もさまざまな舞台で活躍中。



- Q** 今年のダンスワークショップは?
- A** 一回目は基本から。参加者のレベルがどのくらいかを見たいからです。次回から振付をしていき、切れないナイフを少しずつ研いでいくように進めていきます。
- Q** 今年のテーマは?
- A** 参加者の皆さんは、人間ではなく、ある博士が造った人型クローンという設定。クローンは人間として生きてダンスをしたいのですが、それを許さない博士。さて、その関係は...。続きは当日のステージで。
- Q** 昨年のワークショップで印象に残っていることは?
- A** 熱い気持ち、強いエネルギーが感じられるステージになりました。平和(白)対悪(黒)のぶつかりあいが最後には手を取りあいリズムの帝国を作るストーリー。ダンス以外にも多くのことが要求されましたが、しっかりとパフォーマンスしてくれました。感動しました。そして徐々に泣けました。
- Q** これからダンス始める方に一言。
- A** ダンスって本当に面白いですよ。体の中のパーツが大きく、時には小さく、いろいろなスピードで動くのを感じとれるようになります。いつか同じステージで一緒にパフォーマンスできたらうれしいです。

映像の時代だからこそ、ナマの楽しさを。

春風亭 昇太 (落語家)

4/26の「京極断」に参加。静岡市(旧清水市)出身。



静岡の人はよく笑ってくれますね。最近は大阪らしい笑いか、東京らしい笑いかはなくなってきたように思いますが、ただ違うのは、生を見ているかどうか。静岡に帰ってきて、映画の話をするとみんな見たという。でも、よく聞くとテレビで見てるんですね。テレビの吹替えでは、半分位しか見ていないのと一緒でしょう。同じように、落語は想像の芸能だから、

その場所です。その人の話を聞きながら想像して初めて成立するもの。テレビではあまり通じないんですよ。立川志の輔という人がうまいことを言ったんです。テレビはカタログだと。カタログを見て、いいなと思ったら、ナマを見に行く。本場にその通りですね。ナマは別物。映像の文化が発達している今だからこそ、ナマで見るのがすごく大事だと思うんです。

静岡は、東京などに比べて、初めてナマを見る人が多いでしょう。だから、グランシップにはそういう人たちが意識したものをチョイスしてほしい。初めて見るものにナマの楽しさがないと次に広がらないから、こんなものはくぐらなない、芸術じゃないという主観なく、よそでお客さんが入っているもの、面白いといわれるものをどんどん紹介してほしいと思いますね。

# Hop! Step! Disco!

ストリート系 | ディスコミュージック  
ほか

OPEN 14:00 **8/19 Sat**

ディスコダンスからストリートダンスまで。子どもから大人まで楽しめる一日。

- ディスコダンスワークショップ  
ディスコステップからレッスン。DJ/相馬康宏(フライトタイム)
- ダンスショーケース  
「おとみちダンスオーディション」で選ばれたチームが出演。お楽しみに!
- ディスコダンスタイム  
来場者参加歓迎!グランシップ大ホールが大ディスコに!
- ストリートダンスワークショップステージ  
事前開催の「ダンスワークショップ」で完成する  
永田氏プロデュース・オリジナルステージ
- スペシャルステージ クール&ダイナミックなダンスパフォーマンス!  
スパルタニックロックーズ with Pani Crew



1day 1coin (¥500) で楽しむ、グランシップ真夏のダンスパーティ。  
ウマイ・ヘタ不問!音楽にあわせて、LET'S DANCE!

# おとみち

文化のクロスロード

## 2006

入場料 1day 500円 ※何度でも好きな時間に入場OK!  
グランシップ大ホール・海  
●お問い合わせは、(財)静岡県文化財団 企画制作課 TEL054-203-5714

チケット  
発売中

# 真夏の夜のClub Night

**8/20 Sun**

OPEN 15:00

初心者大歓迎。いろんなクラブダンスを体感しよう!

- クラブミュージック&クラブダンスショーケース  
クラブの面白さを初心者向けに解説。さまざまなクラブ音楽とダンスを披露。
- パラパラワークショップ  
90年代パラパラから中高生に人気の今風パラパラまで、世代を超えてみんなでパラパラ。
- しずおかDJ/VJショーケース  
クラブダンス満載のダンスタイム HIPHOPやR&B、テクノ、ハウス、レゲトン、ユーロなど。  
静岡ゆかりのDJ&VJ競演+  
ダンスチームパフォーマンス。
- スペシャルステージ  
ヒット連発のHIP HOPトリオ登場!

パラパラ  
HIPHOP  
ハウス  
テクノ  
トランス  
レゲトン  
ほか



**HOME MADE 家族**  
アメリカ ケンタッキー育ちの  
MICRO (MC)、シカゴ生まれの  
KURO (MC)、クラブDJをしていた  
UCHI (DJ) が1996年に結成。

**HOME MADE 家族**

## 山下

## 洋輔

## ジャズは楽しく大暴れ。

「ジャズがどんどん面白くなって、どんどん上手くなっていく。高3の時にはとうとうプロから声がかかるんですね。生バンドで弾いて、もらったお金がすごかった。子供心にこんなことをして「生暮らせたらなんて楽しいだろうと思いましたよ」

## イタズラ弾きの少年。

ジャズも、クラシックも、どの世界の扉も正攻法で開けたりしない。かといって自著に記している通り、「人間のやることに本当のでたらめはない」のだ。37年前、氏のフリー・フォームにジャズ界が衝撃を受け、その余震が未だ続く中、ピアノ協奏曲や忠臣蔵といったマグマが、時折音楽界を揺るがしてきた。今、目の前で語る氏は、ピアノの前の氏とは違うが油断してはいけない。氏の内なる地殻変動が、いつ起こるとも知れないのだから。

——ご幼少の頃は、ピアノではなく、ヴァイオリンを習っていたらどうですかね。

「母親が近所の子にピアノを教えていまし

たから、物心ついた時からピアノによじ上っては、近所の子が習ったものを耳で聞いて、そのまま弾いてはいたんです。でも、母親が楽譜を持ってくると、それは嫌なんです。すると母親はそれならヴァイオリンを習いなさいと言う。それでヴァイオリンはちゃんと勉強したんです」

——ジャズとはどのようにして出会われたのですか。

「母がアメリカのダンス音楽が好きで、SPレコードをよく聴いていたり、ジャズ好きの叔父がいたりしましたから、ジャズを聴く機会はあったんです。でも、ジャズとの決定的な出会いは、中学3年生の時ですね。6歳上の兄が大学時代にジャズバンドを始めたんです。学校から帰ってくると、家にメンバーが集まって演奏している場面に遭遇することがあって、こっそり覗くと、聞き及びのある曲をサクソスやラップで吹いていたりする。昼間から煙草を吸って、ウイスキーを飲んで、ジャズをやっている。これがカッコよかったです。(笑) あるとき、日頃のイタズラ弾きを知っていた兄が「入ってもいいよ」と言ってくれたんです。そのとき弾いたのが、「オン・ザ・サニーサイド・オブ・ザ・ストリート」。

耳で覚えた曲のイタズラ弾きは得意でしたからね。お兄さんたちが「この子は耳がいい」と言ってくれたのが、それはもう嬉しくって。そこからジャズを一気に勉強するんですけれど、学校の勉強に比べたらどんなに楽しいことか。アマチュアのバンドを見学に行っては、腕を磨いたりしていましたね」

——その頃はすでにピアノと生涯を共にす

るだろうという予感のようなものはおありだったのですか。

「それはいいです。ただ、ジャズがどんどん面白くなって、それに付れてどんどん上手くなっていく。そうするともつと上手いところから声がかかって、高3の時にとうとうプロから声がかかるんですね。今思えば、雑居ビルのスナックみたいなところですけど、その生バンドで弾いて、もらったお金がすごかったんです。大卒の月給が1万4千円の時代、ピアノが弾けたら2万円ですから子供心にこんなことをして一生暮らせたら、なんて楽しいだろうと思いましたよ。だから、大学には行くつもりはなかった。それを親が知って、さあ、大げんかです。高校を出て2年間すったもんだした挙げ句、ジャズをやりながら国立音大に入るという妥協案を得ました。もつとも作曲科に入りたという気持ちはありませんでしたから、作曲のレッスンとあらためてピアノのレッスンをし、大学には入ったんですけれど」

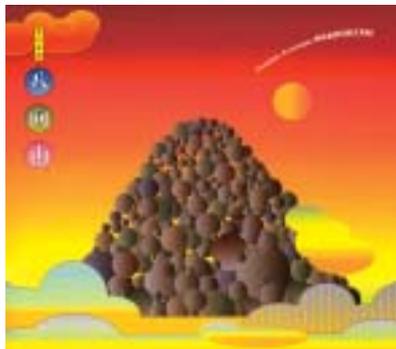
——その後、ストレートジャズからフリージャズに転向されましたが。

「いろいろ苦労がありましたね。病気をしながら、先行きどうなるのだろうと思いつながら、1年半のプランクを経て再開した時、なんか激しく強いものがほしくなりました。それで決めたんです。もう何をやってもいいことにしよう。手本はアメリカのセシル・テラーなどで、あの人たちがやっていた音楽をやってみよう。その頃の日本では、そういうものをやるという人たちがまだまだ少なかった。溜まったマグマがドバツと溢れ

出た感じですね」

——そして、ヨーロッパにも進出。まずはアメリカへ、とはお考えにはならなかったのですか。

「そうですね。勉強のためにどこかに行こ



山下氏と向井滋春(トロンボーン)という日本ジャズの巨匠2人に、あらゆるグルーヴを自在に操るパーカッショニスト八尋知洋を加え、1995年に結成された「室内楽団 八向山」。9月にはこのスーパーユニットがグランシップに登場する。

うと思ったことは一度もないですね。勉強は日本で全部できると思っていましたから。ヨーロッパに行ったのも、我々のフリージャズを見せに行っただけ。森山威男(♯)と坂田明(♯)の3人で、どこに行っても負けるもん

かと大暴れして勝ったつもりなんですけれど。(笑) それでもやはりアメリカはジャズの本拠地だし、一度ご挨拶しなきゃならない。85年に一人で乗り込むわけですが、基本的には誰も知らない新人として、どれくらい通用するのかという武者修行的な野心もありました。ニューヨークから片っ端から飛び入りして、ニューヨークまで行っただけですが、どのバンドでも一応できたし、どこに行ってもお前はニューヨークに行っただけだと言われました。後で考えてみると、あまりにも演奏が変わっているから、その街から早く追い出したかったんじゃないかなあ(笑)」

### 自分がこなすべき道具。

——自分の楽器を神経質に扱う演奏家が多い中、あるときは肘打ち、あるときは炎上するピアノで演奏されたりと、楽器との距離感に独特のものを感じます。

「自分の楽器を持ち歩けないですから、ベタベタできませんね。だから、自分がこなすべき道具であって、どんなピアノでも出てきなさい、どんなものだって自分の音は出せるよ、と思っていないといけない。70年代まではすごいピアノに出会うことがよくありましたよ。ドイツの「ニルンベルグ・ジャズ・クラブ」では、その地下室のアライトピアノは黒鍵がセルロイドでできていたらしく、パンと弾いた途端、粉々になっちゃった(笑)」

——作曲家としては、映画音楽などでも活躍ですが、ヴァイオリンソナタやピアノコン

【やました ようすけ】

ジャズ・ピアニスト。1969年山下洋輔トリオを結成、フリー・フォームのエネルギッシュな演奏でジャズ界に衝撃を与える。'88年山下洋輔ニューヨーク・トリオを結成。'74年ヨーロッパ・デビュー、'85年にはニューヨークに進出。以来現在まで、国内外で演奏活動を展開し、世界中で圧倒的な支持を受ける。'98年今村昌平監督の映画「カンゾー先生」で音楽を担当、'98年度芸術選奨文部大臣賞受賞。2000年の東京オペラシティのニューイヤール・コンサートでは、自作のピアノ協奏曲《即興演奏家の為のEncounter》世界初演。'03年紫綬褒章受章。'04年筒井康隆と組んでジャズ・オペレッタ「フリン伝習録」上演、自作協奏曲「ラプソディ in F」初演。'05年1月の上演「ジャズマン忠臣蔵」が話題を呼ぶ。今年1月新作組曲「Sudden Fiction」発表。2月にニューヨーク・トリオの新譜『ミスティック・レイヤー』リリース。'03年まで洗足学園音楽大学ジャズ・コースの客員教授を務め、'04年から母校国立音楽大学、'05年からは名古屋芸術大学の客員教授に就任。多数の著書を持つエッセイストとしても知られる。'42年東京生まれ。



シンガーほど、いい職業はないと言う。「自分が楽器ですから、好きな歌詞を好きに歌って、完璧にエゴが満足させられる。伴奏させられるほうはたまったもんじゃないですよ(笑)」

チェルトを発表された時には、さすがに驚かれた方も多いかと思いますが。

「あれは突然ひらめいてしまったんですね。86年にガーシュインの『ラプソディ・イン・ブルー』を大阪フィルとやったんです。どうせ1回きりだから、好き勝手やろうと思いましたが、それこそ肘打ちまでして、ハイ、ありがとごうございましたというつもりだった。ところが、面白いと他のオケからも口がかかると、とうとうN響ともやっちゃった。好きに弾いて、大拍手で終わる。しかも後ろにはオケが控えている。これは音楽家としてもすごく気持ちがいいわけです。他人の曲でこんなに気持ちいいんだから、自分の曲でこれができるらと、ある日ピカッと思っちゃったわけです。しかも折よく、2000年の正月に東京オペラシティで何かやらないう話があった。それでいきなり大言壮語しちゃった。自分でピアノコンチェルトを書くから、オペラシティを本拠地にして東フィル(＝東京フィルハーモニー)にも出ていただきたい。そうしたら受けられちゃったんです。(笑)それで、さあ、大変と、2年間かけてピアノコンチェルトの第一番をつくったんですけれど、ただ、あんな風の大言壮語してしまう気持ちは、持ち続けたいですね。ああ、言っちゃった。でも、やるぞ、というところに再び身を置けたらと思いますよ」

——グランシップでもおなじみの茂木大輔さんをはじめ、クラシック畑に山下ファンは多いですね。

「有難いことです。昔、テレビでベートー

ヴェンの五番に乱入して、終わった後、コンサートマスターと握手しようとしたら、睨まれて握手してもらえないという前代未聞の光景が画面に映ってしまったことがあったんです。当時には珍しく、握手してもらえない」というテロップまで出て、僕としては一生の恥なんですけど、その画面の僕に拍手を送ってくれた若い人たちがいたらいいですね。そういう人たちの何人かが、今、オーケストラにいたり。各セクションに一人ずつ、僕を翻訳してくれる人がいてくれるので有難いですよ」

——さて、9月のジャズライブは、『室内楽団八向山』でグランシップにご登場とのことですが。

「私とトロンボーンの向井滋春、パーカッションの八尋知洋。この3人は滅多に集まらないんですが、たまに集まると滅茶滅茶面白い。一人一人がそれぞれの道でバンドのユニットですから、ソロの場面もあるし、この3人でしか出てこない表現もお見せできると思います。このメンバーでなければやらないレパートリーがほとんどなんです。八尋君なんて半分アフリカ人みたいなもので、また日本語がときどき通じない。そんな面白さのある、インターナショナルなドラミング、パーカッションを見せてくれます。『室内楽団』という収まりのいい名前がついていますが、実はカットコで(変態)室内楽団(ハチャメチャ)室内楽団とつけたいくらいのユニットですので、ぜひ、楽しみにしてください」

「G」



9/17(日)

チケット発売中

GRANSHIP JAZZ LIVE  
ピアノトリオ シリーズ #3

室内楽団 八向山

出演：山下洋輔 (p) 向井滋春 (tb) 八尋知洋 (perc)

PM6:00開場 PM7:00開演

グランシップ 中ホール・大地

全席指定(1ドリンク付)

一般 4,500円 学生(大学生以下) 3,000円

ペア 8,000円